

歴史の中の最上川

横山昭男

「はじめに」

私からは、「歴史の中の最上川」ということでお話をさせていただきます。最上川は、山形の歴史を振り返った時に非常に大事なところで関わっていると私は思います。この川とというのが、私たちの生活になくはならない、例えば、産業、文化というものと、もう切り離せない関係を持っていると思います。もちろん、時代によって関わり方が違うけれどもそれぞれの時代に歴史を作る上で重要な関わり方をしていていると思います。特に、日本は非常に山が多い。山が多いから、また川も多い。これは、大小いろいろあるわけです。小さな川が、さらに合流して大きな川になって流れている。日本のように小さな川が、狭い中にたくさん流れているのは、そんなじゃないか、と思うわけです。そういうことで、地形上問題があるわけですが、沖縄などに行くと、そこは川はないと言われるわけです。そこで、この川のある日本のいろいろな地域、社会は確かに山に閉ざされているけれども、川を中心にして一つの流域社会ができています、と思うわけです。その流域社会も、最初はそんなに大きな一つの社会ではなかったと思いますが、その流域社会というのも、

次第に大きな広域の社会になっていくと、今の山形県という、これは行政単位ですけども、それが政治的、行政的に一つにならなければならぬ、という半ば強制的なものもあるわけです。しかし、単に強制的なものだけじゃなくて、その流域社会が一体的なものとしてできていくことを、私は考えたいと思います。最上川が県内だけを流れているということだけではなくて、川の流域は、その流域の産業とか文化の面で一体的になる、そういう条件というものを持っていったんだ、と考えたいわけですね。鉄道が敷かれる以前は、上流から下流へという風に水が流れるだけじゃなくって、経済交流、あるいは、文化交流という必然的なものがあったわけですね。この流域社会として発展していた時代には、よく酒田一方口という言葉が使われていました。それは、出るのも入ってくるのも酒田である、という意味で使っているわけですね。それぐらいこの川というのが、その流域社会を包んで共通的な基盤を作る重要な要素になっているということです。もう一つだけ言いますと、例えばお米の値段というのがあらゆる物資の基本である、という風な時代は、いわゆる物価の基本は米で、これは江戸時代と言わず、ごく最近までそういう面は確かにあったわけですね。その値段がどうやって決まるかと言いますと、酒田相場なんですね。それがまず基準になるわけですね。そしてそれぞれの流域の拠点、例えば、新庄だとか、あるいは東根とか山形、それから左沢ですね。五ヶ所相場と言ったんですが、それらを足して平均する。それを内陸における公定物価にしたんですね。そのことは、その流域が経済的にも

社会的にも、一体的だということの現れのいい例だと思います。山形の最上川の流域の場合は典型的ですね。ところで、その流域社会の話をしように思うのですが、これは、今、私が申し上げた江戸時代のお米中心の時代に、最も典型的に現れる話なんですけれども、それは、決して江戸時代ばかりではございません。そういう流域社会といったものが、それぞれの時代に作られているわけですが、まず原始時代からお話をしていると思うっております。

二、原始から中世へ

最初に原始人の川辺の生活と書きましましたけれども、この原始人の生活ということになると、これは、学問的には考古学が戦後進んでおりまして、年々、たくさん発掘が行われている状況であります。この遺跡の中でも最も多い遺跡は、縄文時代の遺跡ですね。記録された時代というのが、日本ではそんなにないわけですね。およそ千数百年しかないわけですから。それからさかのぼって七、八千年となると、むしろ、その数倍の長さの縄文時代というのが、あったことになりまますから、当然遺跡がたくさんあることは言うまでも

ありません。そこで、この縄文時代というのは、まだ、農業社会が本格的にない、ということ、山とか川の採取経済というのが、基本になるわけです。当然、その山麓、それから、もう一つは、やはりその川縁ですね。その川縁の生活というのが多くなります。今までに研究された成果の一部をですね、まとめたものを見ますと、この山の南面したような所に多いわけです。もう一つ多いのは川縁の段丘上に多い。この段丘上にあるのは、四六%ぐらいですね。特に集中しているのが山形盆地の中でも、北の方にあたる三難所の辺りですね。三難所の一つに三ヶ瀬という所があります。碁点、三ヶ瀬、早房と上流からあるわけです。もうちよつと下流に行きますと、尾花沢盆地の中に大石田という所もありますね。大石田という所は、この奥羽山脈から流れる川が幾つも合流する所です。伊左沢川とか隴氣川とか、丹生川、野黒沢川、いろいろな川が合流するんですが、そこに段丘ができてますね。山の木の実以外に、この川の鮭とか鱒がたくさんとれるし、それを保存出来れば、そこに比較的長く定着して生活することが出来るようになります。そういう遺跡がこの近くに多くあります。最上川、しかも、今言ったその急流、そして、この段丘でも非常に条件のいい所が、原始人の生活の最も恵まれた所であったという報告があるわけです。

古代になって、今の山形県のような地形にとって、川の流れは当然その魚を捕る場所としてだけじゃなくて、交通にも利用されたんですね。古代の通路として、陸上の交通もあります。古代の駅には馬が常置されています。それを利用するのは古代の官人です。国府から国府へ、あるいは郡へ通る役人です。安全な交通というのが確保されていることが、非常に大事です。それで、古代の駅というのが置かれて、その道が出来るんですが、この出羽の国では水駅というのも置かれました。大体最上川のその中流が北の方に、川で言えば下流に出来ていくんですね。そのところは、どちらかというと山手になりますので、山を越して川をわたるといよりは、もう最上川の比較的水も豊富で、安全な所を舟で下るといほうがいいわけです。野後だとか猿羽根とか、あるいは、佐芸といったような駅がございまして、その最上峽を庄内平野に抜けるわけです。こういう水駅というのも、古代の交通の中では非常に珍しいんですね。これが古代の最上川ということになります。延喜式という古代の記録の中で出てくるので、よく知られてるわけです。

やがて、歴史の上では中世という時代になります。この時代は、御存じのように、一つの統制がとれておらず、それぞれ、中央の貴族や寺社が、地方にも荘園を作ったりしているわけです。ですから、たぶん古代にあったような、そういう整備された交通路といったものがなくなりますが、記録もちゃんとしたものがないんですね。おそらくその利用の仕方、局地的になったんだろうと思いますね。最上川流域にも、荘園があります。特にその流域に多い成生の荘とか、庄内の方には遊佐の荘というのがありますが、上流には屋代の荘、長井の荘といったのがあります。その流域と言ったって、それが一貫して、最上川を利用してつないでいるのでは、もちろんありません。ただ、それぞれの流域にそ

ういう荘園があつて、中央とつながっている所は、中世ではそれなりに地域的にも発達してた、と考えていいわけです。この中世の時代というのは、上流と下流とがつながったような発展のしかたというのがない。局地的に利用されていたという風に考えた方がいいと思います。下流は下流で、中流は中流で、上流は上流で利用している。たぶん、丸木舟のようなものがたくさん浮かんでいたと思います。この丸木舟というのは、何も古代とか中世の時代だけじゃなくて、江戸時代、あるいは明治になっても、あるいは最近までも、使われていた例がたくさんありますから、決して古い時代のものだけではないんですけれども、丸木舟のようなものが、主流であつたということは容易に推定出来ることだと思います。そこで、実は、この川の交通が大きく発展するのが、戦国時代から江戸時代にかけての頃です。

三、近世

(1) 最上義光と最上川

日本の年号では、天正年間から慶長年間にかけて、この川の利用も大きく発展しました。最上義光が、山形盆地、それから、最上郡を次々に平定し、庄内地方はかなり時間がかかりましたが、天正の五、六年頃に庄内に進出をした。しかし、最上だけじゃなくて、越後にいる上杉も庄内を狙っておりました。庄内には、領主が誰もいないのかというと、武藤というのが居りました。これは、地頭上がりの戦国大名ですね。武藤氏は、今の大山を舞台にして段々大きくなりましたが、本当に庄内を治めるような力をもっていなかったので、安定した国作りというのが出来なくているんですね。そのために、山形の最上氏が押し寄せる。あるいは、越後から上杉氏が庄内に進出していました。ただ、幸いなことに、その草刈場にあつた庄内は、最上と上杉が両方から攻めてくるということがあつて、自分の国

を維持していたということができません。しかし、そういう国は結局は駄目だったわけで、最後の戦いは、有名な鶴岡と庄内の間で戦った十五里河原の戦いです。それは、最上と上杉の戦いで武藤氏は、最上からも上杉からもぶんどられ、引き裂かれるようになった。そして、結局は激突した結果はどうなったかという点、上杉の勝利であったわけです。最上はそのために退却したんです。そこでしばらくは上杉の領地となったわけなんです。しかし、いつも最上氏は庄内を自分の物にしようとしておりました。それで、最上川の下流の新庄盆地の一角に清水っていう所があります。これは、後に新庄市の外港にあたるのですが、ここに最初進出しているんですね。それから、もう一つは、ここを拠点にして酒田に進出する、ということも狙っております。つまり、最上川を征服することによって、庄内に出ていくということですね、とにかく、その最上川を支配することと、この庄内への進出というのは、最上義光にとって切り離すことができない関係にあった、と言ってよいと思います。最上川を支配しなければ、庄内は自分の物にならないというんですね。この最上川の支配については非常に力を入れた、ということになります。但し、先程言ったように、十五里河原の戦いでは負けたわけですが、その後、上杉と最上の大きな戦いは、御存じのように関ヶ原の戦いでありませぬ。この関ヶ原の戦いの、言わば東北版とも言われるのが長谷堂合戦ですね。最上氏にとって朗報があつて、長谷堂の合戦はまだ終わってなかつたんですが、関ヶ原の戦いが終わると、この上杉は豊臣方ですから、最上と上杉の関係が、

どのようになるかは明らかです。最上氏は一三万石であつたんですが、慶長五年の末に、徳川から頂いた領地は五七万石、あるいは、七五万石とも言うんですが、後には実質百万石ともいわれる領地を頂くことになるわけですね。上杉は逆に一二〇万石から三〇万石となり、まったく明暗を分けることになりました。それでは、この庄内がどうなるかと言いますと、庄内はそれまで上杉のものだったんですが、最上がいつきよに五七万石になったことによつて、庄内はもちろん最上の領土になりました。そして、庄内だけじゃなくて、さらに、現在の秋田県の由利郡も最上の領地になりました。今の山形県で言えば、山形県の置賜地方を除いたすべてと秋田県に跨がって、最上領国というのが出来た、ということになりますね。その間、最上川というのは、最上領国の最も重要な交通路になっていきます。庄内に発展していくために、最上川を支配を狙ってたわけで、それが、初めてこの関ヶ原の戦いの後、実現したことになるわけですね。この義光が最上川を開発したその時期は、若干、異説がありました、かなり早い時期に考える説もあります。天正年間ですね。高掬という所に専称寺がありまして、これは、後に義光によつて、山形に移されるわけですね。その寺に願正坊という方がいるんですが、この願正坊の縁起というのがございまして、義光の業績について非常に詳しく書いておられます。この縁起の中に、最上川のことが出てまいります。義光と最上川については最も詳しい記事であります。その中にですね、年代は、はつきりしたことを書いてないんですけども、天童を打ち落としたあと、最上川の三難

所を開削したと書いてございます。それから、さらに続いて、大石田や船町に船着き場を作ったとも書いてあります。それから、羽州街道から大石田に行く道路を開削したということも書いてあります。しかもその開削するために、三ないし四年にわたって、夏にその三難所をきつたと書いてございます。これは、夏、濁水になりますね。この川の底の岩石をきり取るには、水が無くなった時がいいわけです。これは別に年代ははっきりしませんから、天童を落としたのは、天正の遅くとも九年、天正年間の半ばということになります。天正は十八年までもありますから、これはまだ庄内を取る前ということにもなるわけです。そこでむしろ、この天正年間というよりは、最初に話をした五七万石という国を最上氏が貰って、そして、この最上川を支配するようになったこの慶長の始めに、三難所の開削とか大石田とか船町とかの船着き場を作ったのではないかと思つてます。大石田の河岸を作ったのは何年かというようなことも、はっきりした記録がありません。但し、大石田という所も、後に言う大石田の船着き場が出来るのは、自然発生的な集落でありませんで人工的なものですね。最上氏の後にすぐ来たのは鳥居という山形の大名ですけども、鳥居比が実施した大石田には有名な元和検地帳が残っています。その大石田の検地帳を一枚一枚めくってみると、計画的なことがわかるんですね。屋敷については、自然発生的なものとははっきりちがうと思います。それで、大石田については、その起源は慶長の始めであろうと考えることができるし、船町も同じ時期に作られたとみられます。それは酒田とか

加茂についても言えるのです。加茂ついでのは、山形県では酒田に次ぐ第二の港ということになっていくわけです。もちろん、酒田に比べれば非常に小さいですけども、この町割りも慶長年間に行われていきます。酒田も同じです。この酒田には義光が関係する前からお城も港もありました。この最上川に新しい船着き場が次々に作られ、そこに新しい町を作ったことが一致するのです。この酒田町が整然と町割りされて完成していくのはいつかと言うと、慶長年間です。これも最上義光の大領国作りの一つの事業であるわけです。山形もそのころに作られるわけで、今、最上川に関する話を中心にしていきますと、そういうことになるんですね。この一連の交通路、それに関する町作りが一斉にされたということがよく分かります。以上が最上義光と最上川ということになります。

(2) 西廻海運と酒田

さらに、この酒田がその後発展をするのはいつかと言いますと、有名な河村瑞賢という江戸の商人が西廻り海運を整理するということが、非常に大きな契機になってるわけです。河村瑞賢と言えば、中学校や高等学校の教科書には必ず出てくる人物ですから、非常に有名であるわけです。河村瑞賢は伊勢生まれ、紀伊の国で材木商人となり、江戸に出て江戸大火に出会い、そこで江戸商人として有名になったのです。この江戸商人であった河村瑞

賢が、その町作り、あるいは、家作りだけじゃなくて、幕府の御用を受けて西廻り海運の計画を行うわけです。その前には東廻り海運をやるわけです。西廻り海運は長いし大きいということである。東廻り海運の方は、阿武隈川の流域の幕府の領地でありましたので、その年貢米を阿武隈川を下して、荒浜という所から江戸へ運ぶというのが、その東廻り海運の狙いです。それから、もう一つのこの河村瑞賢の狙いは最上川流域の幕府の領地ですね。最上川流域には、このころもう一五万石以上の領地がありました。元禄頃になると、一九万石ぐらいになりますけれども、これはかなりの領地ですね。幕府領、あるいは天領といえます。最上川流域は、秋田あるいは新潟と並んで米所です。しかし、秋田とか信濃川よりもこの最上川流域は、幕領が多いのです。最上川流域は幕領がたくさんありますので、その年貢米をいかにして直接江戸に運ぶかが非常に大きな問題でした。そこで考えたのが西廻り海路であったわけです。これは、寛文の十年から十一年に掛けて計画されるわけで、それが、間もなく実現いたします。幕府としては直接自分の手で年貢米を蔵に保管し、その蔵から幕府が準備した船に積んで江戸に輸送するというのが狙いです。その際ですね、これも西廻りという風に言いますのは、その前は、大体ほとんど敦賀とか小浜という所で、港で陸あげして、そこから琵琶湖の近くの街道を輸送するわけですね。大津まで行って、大津から京都に行く。そして、大阪に行くというルートです。それは陸送ですから、大阪に出るのも非常に大変であります。さらに江戸に持っていくのも、

また、そこから船に積むということになりますね。それよりも、下関を廻って瀬戸内海、そして、大阪から江戸までは菱垣廻船と言った定期船がありましたから、それに乗れば江戸に行きます。そういうルートを西廻りと称したわけです。この河村瑞賢が、その輸送ルート、あるいは、輸送の仕方を整備したということです。先程、船の話をしました。これも言わば、官船と言いましたね、どの船を官船に指定しているかと言いますと、ほとんどは、瀬戸内海の大型の船ですね。この塩飽船という船が主なんです。もともとこの塩飽船というのは、古い時代には海賊船でありまして、海賊船になったということは、戦国時代に有力な商人たちが居たという証拠でもあるわけですね。江戸時代になると、そういう海賊船というのは失くなるし、活動は出来なくなりますが、それが、この幕府によって利用されるということで、日本海にこの塩飽船を中心にした、西国船が入って参ります。これが、江戸まで米を輸送する西廻り海運というのが出来ると、最上川の川船の輸送体制というのも出来ていくことになりました。その川の輸送は、最上川の流域の幕府の領地の米を、どういう形で舟に積んで酒田に運んだのかですね。幕府の米だけじゃなくて、それぞれの大名の米もございます。私領米あるいは、蔵米と言いましたけど、これは、どういう風にして選ばれたのか、もう一つは、幕府とか大名の荷物というのではなくて、民間のあるいは一般商品の荷物が、どんな風に運ばれたのか、その運び方が問題であるわけです。これは、最上川だけではなくて、他の川でも当然あります。但し、他の川々が、必ず

しもみな、同じであったわけではありません。ですから、流域社会のあり方によって、川の交通のあり方も規制され特徴づけられている、ということになってくるわけです。

(3) 最上川舟運の特色

次に考えたいことはこの最上川舟運の特殊性ということですが、最上川舟運の特殊性というのは何で決まるのか、ということが言われると思います。これは、また、色々な点から、見なければいけないのかと思いますけれども、先程もお話ししたように、まず第一には、その舟運を特殊づけるものは流域の支配関係である、という風に思います。もちろんここでは江戸時代のことでありまして、この舟運の発展というのは、中世にも江戸時代にも近代になってからもあつたんですけれども、川船舟運は、この江戸時代に歴史上最も発展をしたものと私は思っております。それから、江戸時代に最も発展した理由はこの物資輸送、中でも最も大きいのは米です。米以外にも木材を輸送する所もありましたが、そういう重い米とか木材とかが大きかったわけです。その中でも米が非常に大きかったです。しかも、米というのは全国的につくられ、しかも、税金として徴収され納入するわけです。江戸時代には、税金は物納で米納ですね。この米で納める、というのが原則です。そして領主が要求する所へ納める、ということになっております。領主が要求する所というのは中央の市場

なんですね。中央の市場というのは、何と云っても、大阪とか江戸です。そうすると、そこまで持っていかなきゃいけないわけですから、そこで、輸送するために海上、川、陸上とこうあるわけですが、陸上輸送は日本ではとても大変です。軽い荷物であれば運び継ぐ、という風なこともありますけど、米のようなのは、日本のように山の多い所では大変ですね。特に、日本ではヨーロッパなどのように、陸上の交通手段というのが発達しなかった、というのが特徴です。日本の近代以前、汽車以前のもものは例えば、馬車とか荷車です。ですから、遠距離輸送が出来ません。つまり、山を越したり峠を越すということは、たいへんなことですね。今のようには、トンネルが掘られていけばいいですが、これは、ほとんど出来ない。それから、もう一つは、橋が無いし川もたくさん流れている。最初に話したように、橋が無いんでは荷車や馬車が、仮に、技術的に作ることが出来たとしても、日本では陸上交通が非常に制約を持っていたということになるわけです。それでは、運搬手段と云うのは何かというと、先程言ったように水上輸送なんですね。川であり海です。幸い、海や川は、自然の交通路と言ってもいいわけで、それをいかに利用するかなわけです。その水上輸送交通が、それで発達をしたということですが、それが、近代になって初めて、次第に衰退するようになっていきますけども、それは、明治も半ば以後ということになるわけです。明治二十年代になると、仙台まで鉄道が来ますが、山形に来るのは明治三十四年、三十年代も半ば以後ということになりますね。奥羽本線が完成するのが三十七年です。そ

これから、裏日本と表日本という言葉が使われました。裏日本と表日本という言葉は、鉄道の開通の早い遅いによってできたといえます。十何年の差というのは、大変だったわけです。しかし、鉄道が出来る以前は、逆に、西廻り回運、東廻り回運、という話をしましたけども、日本海の方は非常に活発であつたんです。古くは北国船という船が走り、その後は北前船という船が頻繁に走つたのです。むしろ、太平洋側よりは活発であつたと言つた方が当たっているわけです。しかし、明治以後、近代になつてからはですね、先程言つたようなことがございまして、裏日本とか表日本とか言われるような、ある意味で差が出来てきたわけですね。しかも、明治以後の発展というのは、極めて急速でありましたので、その十何年というのは、大きな違いを生むという面もあつたわけです。江戸時代に水上交通が最も発展したのだ、ということをつかつていただくとよろしいわけです。その川によつて、先程言つたように、一つは川の流域の支配、もう一つは、川の産業の違い。これが、最も大きな特殊性を生む条件であると思ひます。そこで、まず、流域の支配の違いがなぜ、その河川交通の特殊性を生むかといひますと、例えば東北はですね、日本でも大河川の最も多い所です。東北の河川は、そういう意味では、最も重要であるわけです。よその地域に比べて、東北の河川の役割つてのは、非常に大きいことになるわけです。その東北の河川の中でも、例えば北上川は最も大きい。その北上川の場合、流域はというと、南部藩と仙台藩なんです。流域の支配というのは御存じの通り、その大半が、二分してこの流域を

支配しておりました。ところが、この最上川の流域の場合には、最上義光がいた時は、まだ、治まっていたんですが、それが最上義光が慶長十九年に死んで、その後に藩主が代わります。彼は義光に比べれば政治的に無能でありまして治まらない。それが原因で最上家が没落する。その後になつたかといひますと、山形には鳥居というのが来ますが、鳥居もそんなに長くなくて、その後保科とか松平とか奥平とか、次々に数十年の間に替わります。そして、その他の地域、つまり五七万石の所に、山形の大名は二二万石ですから、各地にいくつかの大名が入つてくるわけですね。庄内には酒井氏、新庄には戸沢氏、上山には松平氏、それでもまだ余つてゐる。五七万石だから、その余つてゐる所は幕府の領地だったんです。この幕府の領地が、最上川流域にはたくさんあつたんです。そして、最上川のさらに上流は置賜地方ですが、そこには、この米沢藩上杉氏があるという。こうなりまして、この流域には、色々な大名がいたが、別々な川を持つてたわけじゃない。最上川を利用するわけです。最上川の上流か下流かの違いであつて、やはり、最上川なんです。上流から下れば必ず、中流、下流と行くわけなんで、上流だけ利用すればいいんだつていうわけにはいけません。酒田一本口です。みんなこの川はある大名のものだけじゃないし幕府だけのものじゃなくて、みんなのものなんです。そうすると、当然、最上川利用については、共通のルールを作らなきゃいけません。そこで、出来たのがこの最上川の、特徴的な舟運の体制なのです。秋田の雄物川であれば、佐竹が専ら支配してますから、佐竹

の一つの支配の仕方を通るわけです。北上川であれば、上流が南部藩、そして下流は仙台藩ですから、上流と下流に分けて、上流から下流まで下りますから、そこところは協定しなきゃいけません。北上川とか雄物川の場合には、ほとんど、藩の船なんです。御手船とも言いますが、仙台区の場合は御穀船、というふうにも言いました。別の言葉で言うと、藩船と言ってもいいんですが、藩の御手船とも言います。ところが、最上川の場合には、主流は町船となっていました。町船、その船の形は艀船です。ですから、この形から言うと雄物川、北上川を走っている船も同じなんですけれども、誰の船かということになると、最上川の場合には完全に町船なんです。そういうことで、一つの最上川の舟運の特殊性が出てくるわけです。この船のさらに地域的な所属を言いますと、一番多いのは酒田船です。それから、もう一つ大きいのは大石田船。これは、所属で言った場合の名前なのです。資料に寺津、寒河江、船町、大石田、清水とこうありますが、ここから、荷物を積んだということなんです。たくさん積んだ所は、河岸場が賑わったということを表すことになります。この五つはですね、ずっと、この江戸時代を通して、大きな河岸場なんです。これ以外には、いわゆる河岸という所は、寺津から下流にはございません。いわゆる船着場というのはございます。しかし、それは、年貢米しか積めないのです。ですから、そういうのは河岸と言わない。しかし、船着場というのは十いくつあります。それから、もう一つこの表で言うと、上の方に一、二、三とあります。荷物はこの三種類あ

ります。これは、どこの川にもあったわけです。この一番というのは、上米と書いてあります。これは幕府の年貢米です。その次、二番が大名の年貢米です。私領米ともいいました。それから、三番が商人の荷物です。船の数でこの荷物の量が、大体、想像つくわけです。上は三六〇艘から一五〇艘、三二〇艘、またこういう荷物が運ばれる場合に順序があるんですね。幕府、大名、民間と順もありまして、同じ町船でも民間の船だから、一番先に民間の荷物を積んではいけない。民間の船だけれども、最初に積むのは上米でそれが済んだら大名の米です。それが全部済んだ後、民間の荷物を積んでいいのです。いや、船は民間の荷物しか積まないということは許されないので。そういう規制というのがあったんですね。それから、小さな船はたくさん荷物、城米などを積みません。小さな船は危険なので、使わない。そういう統制もあつたということですね。それから、もう一つは川船の統制にあたるですね。これは藩船だけだと、当然、その藩の役人がやればいいわけです。商人の船、つまり町船が走っておりますので、その統制は、差配人というのを民間で選ばせてやりました。川船差配人といいました。これは、酒田にも居ります。それから、上流にも居ります。ある時期には、この川船差配人というのは入札でやりました。入札ですから、何を決めるかっていうと、もちろんお金ですね。冥加金をどれくらい納めるかで多い方に決るわけです。その冥加金は船持から徴収します。差配人は多く河岸の商人が当りました。また船持ちの代表が、その川船の統制にですね、加わってるということになっ

ております。こういうことは、この最上川の舟運のいずれも、特色であったと思いますね。その要点だけをお話しました。

(4) 舟運文化

それから、もう一つ、この舟運文化が語るものに移りますが、これも興味ある問題です。一つはですね、移入梵鐘で、多いのは京都か大阪です。近世初期といたしたのは、江戸時代の初めで、十七世紀から十八世紀にわたります。移入品は、酒田からすべて入ってきましたけれども、地元で作るのもあります。地元で作るのは、元禄よりかなり後になります。大量に作られるようになると地元産があるんですが、初めのうちは移入なんです。日本海、そして、最上川流域を通過して江戸時代の初めに、こういう梵鐘が入ってきた。非常に重いですから、船に積まなければ運べないんです。そういう交通ルートが発展するんですね、どんどん内陸に入ってきたと、あるいは海を渡ったと言える。それは非常に面白いな思ってたわけです。こういう一つのルート、文化の流入ですね。これを通して考えられるのではないか、ということですよ。その他、簡単に申し上げますが、この最上川流域には、谷地の京都の雛と石燈籠、これも同じように、重いものです。そういうのがですね、神社とか、あるいは、当時の商人の庭などにあるということ、あるいは、村の鎮守、寺に建っている

のは、完全に最上川交通、あるいは、その文化の印であります。金毘羅さんは琴平宮のことですけど、象頭山っていうのは琴平山のことを言いました、その瀬戸内海を船が通る時の、一つの目印であります。交通安全を祈る神様なんですね。そういうものが、この流域、あるいはかなりの範囲に渡ってまして、今でも、その祠を作って信仰をしている所が非常に多いわけです。それから、もう一つだけ、山形の住宅文化として言われている蔵座敷ですね。これは、全国でも最も多いということになっている。もちろん、その蔵座敷を持てるということは、誰でもが出来なかつたけれども、商人の間に普及したのです。山形程、そういうものがある所は少ないと建築史家たちは言っております。しかも、山形にあるこの蔵座敷は、江戸風と京、上方風の折衷なんですね。その折衷の例の一つだけ上げます。山形で見られる蔵は、大体、この漆喰で全部を包みまして、屋根というのが帽子のように浮かんでるわけです。これは木組みになっていて、その上の方は瓦の場合もあるしトタンもございますけれども、元は木組が多かつたわけです。どちらかというと、蔵座敷のようなのは江戸的なものなんです。ところが、江戸のものはですね、大体、この漆喰と瓦とをくつつけてある。これを塗り込め、と言うんだそうですが、実際に江戸の古い写真を見ると全部そうなって、堅く塗り込んでいます。ですから、外から、もう瓦と漆喰になつてますから火が入りません。ところが、山形の場合は、上に帽子を被つたみたいになつて中側が風通しがよくなつて。建築評論家によると、山形の風土にあつた一つの

建築として、出来上がったものじゃないかとも言われているようですね。ですから、上方風と江戸風の折衷かとも言われているんですが、そういうことであれば、これもまた面白いな、という風に思います。ある人が材木で作ってあるんだから、火事が移るんじゃないかと言ったんですが、しかし、それは入らないんだと、上の方も同じように厚い漆喰で大体一メートルぐらいありますから、焼ける部分は上の帽子だけ、焼けちゃうんですね。ですから、その形式も、もちろん、山形ですべてが作り上げられたものではないんですが、これは、上方風、それに江戸風ですね、一部導入しながら、その郷土に合ったように風土性を考えて作られたものではないかなと、思っております。しかし、それが、この山形の風土に、どのようにマッチし、あるいは、合理的なのか、といった細かいことまでは、私もよく分かりません。これは、みなさんもぜひお考えいただければという風に思います。以上で、私の話を終わらせてもらいます。(拍手)